

令和5年度 第1回地方独立行政法人京都市産業技術研究所

評価委員会 会議録

日 時：令和5年8月18日（金）午前10時30分～午後0時07分

場 所：京都リサーチパーク1号館 4階 G会議室

議題等：（1）京都市産業技術研究所 業務概要について

（2）委員長の選出及び委員長代理者の指名

（3）令和4年度の業務実績評価について

（4）その他

議事要旨：

- ・以下、各委員の質問・意見など（○：委員、●：京都市、◎：産業技術研究所と表記）

【1 開 会】

- ・石田 京都市産業・文化融合戦略監からの挨拶

【2 議 題】

（1）京都市産業技術研究所 業務概要について

～京都市産業技術研究所から説明～

- ： 組織改正をしたという説明があったが、市内中小企業への下支えという点を踏まえると、昨今話題になっているAIの活用や課題について、相談できる窓口が産技研にあればいいと思うがいかがか。
- ◎： 組織としてAIに特化した部門を組んでいる訳ではないが、業務概要において触れた日本繊維機械学会の論文賞を受賞した論文はAIを活用した事例であり、当該研究員はその研究を通じて学位を取得している。また、内閣府のバイオ戦略に基づく関西広域の官民ネットワーク「バイオコミュニティ関西」の取組の中で、分析・計測分野における分科会を立ち上げており、その取組の中でデータサイエンティストの育成に向けた準備も進めている。
- ◎： 御指摘のとおり、AIやDXの分野に対する中小企業の関心の高まりを感じている。産技研は技術支援を専門とする機関であるので、技術的な側面からAIやDXをどう活用していくかということに注力しながら、京都高度技術研究所を含む支援機関や京都市などと連携し、オール京都で事業者の支援をしてまいりたい。
- ： リニューアルされた広報誌でもAIに関する取組等を紹介していただければ、企業が相談してみようというきっかけとなると思うので検討いただきたい。

(2) 委員長の選出及び委員長代理者の指名

- ・ 吉本委員を委員長として選出。
- ・ 吉本委員長が宮本委員を委員長代理に指名。

(3) 令和4年度の業務実績評価について

～事務局から評価の流れについて説明～

～京都市から資料1及び資料2に基づき評価案について説明～

- ： 技術相談について、数値目標という件数の達成率により評価を行っているが、これでは相談・成果のクオリティが見えてこない。経済効果や技術相談のリピート率などを示すことでクオリティの見える化を促進してほしい。
- ： 産技研では、令和5年度から利用者に対してアンケート調査を行っているところである。アンケート調査の結果も踏まえながら、クオリティの高い技術相談体制となっているか確認してまいりたい。
- ： 指標1や指標3のように単年度の達成率が高い指標が目立つが、数値目標は修正しないのか。特に、指標3については、第2期の実績を下回る目標設定となっているが理由は。
- ◎： 目標を設定した時期が前中期計画期間中であり、また、コロナ禍で設定したという事情もある。
また、指標1や指標3に関わる技術相談等は入口に当たる部分で、そこから次のサービスにつなげていくことを想定しているものであり、現中期計画期間中はこの数値目標を基にして事業を構築していく予定である。
- ◎： 補足すると、指標1に設定した新規利用者数という指標には、産業支援機関として常に新しい顧客を取り込んでいかなければならないという思いがある。そうした観点から、令和4年度当初の組織改正時にアライアンス推進グループを組成し、積極的に企業訪問した結果として新規利用者数の増加につながった。まずは利用していただき、次のサービス、より深いところで顧客の役に立っていきたいと考えている。また、指標に関しては職員数が減少している中、限られたマンパワーの中でメリハリを付けて設定をしている。
- ： 技術相談の指標について、京都市としては、数値が増えれば増えるほどいいという考え方で設定しているものではないと認識している。令和4年度は組織改正などの取組を行った結果、数値目標を達成したという過程を踏まえて評価した。次年度以降の評価については、単純に前年度の数値を上回ったから良い評価をするといったものではないと考えている。

- ◎： これまでは利用者に対して満足度調査を年に1回実施していたが、今年度からは調査の回数を2ヵ月毎に変更することに加え、調査項目についても課題解決の達成度を調査するなど工夫を行っている。
- 公設試という業務の特性から、定量的な評価には限界もある。定量的な把握に加え、定性的な評価を加えて先に御指摘のあったクオリティの部分もしっかりと捉えてまいりたい。経済効果や費用対効果の算出方法については、大学の研究者やコンサルティング会社にも相談を行ったことがあるが、難しい部分もあり、全国の公設試も苦慮している部分でもある。どのような評価が適切であるかについては、引き続き研究してまいりたい。
- ： 産技研の発展のためには京都ものづくり協会の発展が不可欠であると感じた。
- また、研究会活動については、事業等の実施後、その都度スピーディーに課題に対応し、それを産技研職員の中で情報共有することで、職員一人ひとりが自分事として考え、改善に役立ててほしい。
- 本日お集まりいただいた委員をはじめ、第三者からの情報や知見を大いに活用してこれからも組織運営していただきたい。
- ： 全体として数値目標を達成している指標が多く、頑張っているという印象をもった。令和4年度に実施された組織改正の効果はどのあたりに感じているか。
- ： 京都市としては、第3期中期目標の中で掲げている「スタートアップ支援やイノベーションの創出による新しい価値の創造」といった支援に産技研が取り組むことで、京都のものづくりの発展に寄与すると考えており、組織改正により一定の効果があつたと感じている。
- ◎： これまで分野別でチームを組むという組織体制であつたが、どうしてもクローズになってしまうところがあつた。一方で、例えば伝統産業分野であっても飛躍のために先端的な技術が必要とされるケースもあるので、チームの枠を取り払って分野横断的な組織に改正した。結果として、複数の分野の研究員が協力して技術支援に対応する事例などが増えている。今後は、研究開発においても分野横断の取組を進めることで、大型のプロジェクトなどへ発展できるよう取り組んでいく。
- ： 評価案について説明いただき、1年間の成果がよくわかつた。
- 評価の方法について、令和4年度は第3期中期計画の初年度ということもあり、中期計画の目標値を単純に4で割った数値を基に年度評価をされているが、数値以外の部分でもっと評価されてもいいと思う項目が2つあつた。
- 1つ目は、大項目第1小項目1の「(6)研究会活動」の指標10「新規会員獲得数」で、全国的に法人数が減っており、新規の会員獲得が難しい中、会員数減少を2社に留めている。

2つ目は、大項目第3小項目2の「多様な財源の確保」の指標14「自己収入の獲得」で、単年度の数値目標は未達でも努力は感じられた。産技研を持続可能な組織にしておくために、今後も財源確保は意識し取組を続けていただきたい。

この2つの小項目については「B」評価ではなく、「A」評価でもいいと思うがいかがか。

- ： 産技研の評価委員会条例第6条第4項において、「委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところとする」とある。大項目第1小項目1および大項目第3小項目2の評価についていかがか。
- ： 数値以外の部分において評価するポイントは人それぞれであり、悩ましいところであるが、私は「B」評価のままでいいと思う。それよりも評価コメントなどを受けて今後の活動につなげることが大事である。
- ： 数値のみで判断するというわけではないが、数値目標を設定している以上、達成していないのであれば「A」評価にすることは難しい。
- ： 他の委員で「A」評価にするべきという方がいなければ、産技研へのエールを送るという意味合いも込めて、この2つの項目については「B」評価のままとしたいがいかがか。
- ： 異議なし。
- ： 質疑応答の中で、京都市の評価案を修正するという結論には至らなかったもので、評価としては案のとおりとさせていただく。なお、御意見としていただいた数値目標の妥当性や相談・成果のクオリティの評価方法は今後の課題として検討させていただく。

(4) その他

～事務局から今後の予定について説明～

【3 閉会の挨拶】

- ・京都市産業技術研究所からの挨拶